

ニューギニア系言語の話者は敬語を使うのか？

アメレ語の場合

野瀬昌彦

Masahiko Nose

滋賀大学 経済学部 / 教授

I はじめに

本研究では、パプアニューギニアで話されるニューギニア系 (Trans-New Guinea) 言語の一つであるアメレ語 (Amele: Roberts 1987) を取り上げ、アメレ語が敬語の用法を持つかどうかを、調査した¹⁾。

その結果、アメレ語が文法的な敬語形を持たない代わりに、語彙的な方法で敬意を示す。加えて、パプアニューギニアの公用語であるトクピシン (Tok Pisin)²⁾からの借用語を利用したり、またはアメレ語ではなくトクピシンや英語を話すことで敬意を示したりすることを発見した (cf. Nose 2024)。本稿では、アメレ語の敬語用法の貧弱さや用法に関して、社会言語学的な点から説明を試みる。

アメレ語は、パプアニューギニアのニューギニア島の北西部にあるマダン州の海岸には面していない低地で話されるニューギニア系の言語のひとつである (次ページの図1を参照)。アメレ語の先行研究としては、Roberts (1987) による記述文法書が存在し、文字は基本的にアルファベット表記でなされるが、話し言葉主体で使用される。書き言葉は限定的で、新約聖書のアメレ語翻訳版があり、また、Nose & Neret (2015) による「白雪姫、ヘンゼルとグレーテル、三匹の子豚」の英語・アメレ語・トクピシンの多言語翻訳がある。アメレ語の話者は数十の村に居住し、全体でおよそ6,000人前後であるが、話者のほとんどがトクピシンとのバイリンガルであり、若年層を中心に多くの者が英語を話すことができる。

1) 著者は2006年に初めてパプアニューギニアおよびアメレ語が話される村 (Sein村) を訪問し、それ以来、ほとんど毎年、8月から9月に2週間程度滞在し、現地調査を実施している。2020年から2022年はコロナによる海外渡航制限で訪問できなかったが、2023年8月から9月にかけて久しぶりに訪問し、調査をすることができた。

Nose (2020)によれば、アメリ語話者は、話者の少なさやトクピシンのバイリンガルという状況であるが、彼ら自身の言語を比較的しっかりと維持している。そのため、絶滅に瀕した言語の分類にはならない。実際、小学校入学前の幼児に対して、コミュニティスクールを作り、簡単なアメリ語や彼らの伝統や文化を教えている（なお、小学校以降のパプアニューギニアの学校教育は英語でなされる）。

本稿では、第2節で先行研究の概観し、第3節でアメリ語のデータでもって、敬語形の有無や丁寧表現のデータを観察する。第4節でアメリ語に敬語形がない理由やその代替形式に関して社会言

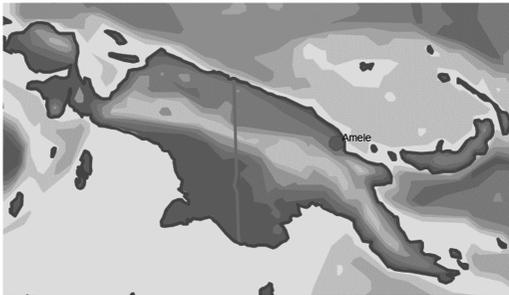


図1:アメリ語が話される地域 (WALSのLanguage Viewerによる作成: Haspelmath et al. (2005))

語学的な観点から議論し、第5節で結論をまとめる。

II 先行研究と パプアニューギニアの言語状況

本節では、本研究の目指すところのニューギニア系言語の敬語表現を探るという目的に関連した

2) トクピシンは、英語とモツ語(Hiri Motu)と合わせて、パプアニューギニアの公用語のひとつである。ただし、マダン州ではモツ語が話されることはなく、トクピシンと英語のみ使われる(著者の観察による)。トクピシンの語彙や文法には英語の要素が多数含まれているが、いくつかの語彙や文法は、マレー語やメラネシア地域の言語の影響がある。また、パプアニューギニアが位置するメラネシア地域で話されるソロモンピジン(Solomon Pidgin:ソロモン諸島で話される)とビスラ

先行研究を概観する。敬語研究の先行研究では、ヨーロッパの言語に見られる2人称の単数・複数による“Tu/Vous”(以下T/Vと記す)の使い分けと、アジアの言語に見られる文法形式としての敬語研究が代表的である(Meyerhoff 2015)。加えて、本研究が取り上げるアメリ語やパプアニューギニアの言語状況について紹介し、アメリ語の調査の目的を明らかにする。

ただし、気をつけなければならない点は、アメリ語をはじめとするニューギニア系言語は500言語以上あり、それらの文法や語彙はお互いかなり異なっており、ゆるやかに“Trans New Guinea”という語族分類となっている点である。そのため、他のニューギニア系言語には複雑な敬語体系が存在する可能性はある。

ニューギニアで話される言語の概説的な先行研究としては、Foley (1986, 2000) やLynch (2018) 等があり、敬語表現に関する先行研究としては、Brown and Gilman (1960)、Meyerhoff (2015) 等があり、特に日本語の敬語に関しては多数あるが、本研究では主に滝浦(2005)に基づく。

2.1. 敬語表現に関する先行研究

敬語という文法形式は、言語にとって文の意味に機能的な役目を与える必須の事項ではない。敬語形は統語論の事項ではなく、むしろ話し手と聞き手の関係性(基本的には談話に参加する人々の上下関係)に基づく。そのため、言語研究の分野では、語用論に属する事項である。また、敬語が文法的に高度に発達している言語(日本語や韓国語、ジャワ語など; Ismatul (2011))がある一方で、

マ語(Bislama;パヌアツで話される)とも語彙や文法がほぼ同一で、お互いコミュニケーションが可能である(Nose 2020, そしてエスのローグのアメリ語に関する記述: Ethnologue (<https://www.ethnologue.com/language/acy/>: 2024年5月10日アクセス)。

敬語が比較的未発達な言語（英語を主とするヨーロッパの言語など）が存在し、ヨーロッパの言語を中心とする言語研究においては、周辺部に位置する研究トピックとなる³⁾。

敬語に関して先行研究の大きな動向には、2つある。一つ目は、ヨーロッパ系の言語に観察される2人称の人称代名詞の形式（単数と複数）を使い分けである。以下の(1)にいくつかのヨーロッパの言語に見られる人称代名詞の使い分けによる敬意の相違の例を示す(Brown and Gilman 1960; Meyerhoff 2015)。

(1) a. フランス語:

2人称単数: tu

2人称複数(敬意あり): vous

b. ハンガリー語:

2人称単数: te

3人称単数(敬意あり): ön, maga

例えば(1)では、フランス語のT/Vの使い分け(親しい場合は2人称単数の“tu”で呼びかけ(親称)、目上の人や初対面では2人称複数の“vous”を使用する(敬称))は有名(Brown and Gilman 1960)であるし、インド=ヨーロッパ系言語ではないが、ウラル系のハンガリー語では3人称の単数形“ön, maga”が敬意を持つ点で、少し異なる。ただし、ヨーロッパ系の言語であるはずの英語においては、2人称単数・複数がどちらも“you”であり、使い分けによる敬意の区別はない⁴⁾。

もう一つの敬語研究は、敬意を意味する文法形を持つ言語に関するものである(滝浦 2005)。これは、いわゆる尊敬形(polite forms, honorific forms)の用法である。これは、日本語や韓国語、タイ語などのアジアで話される言語に観察される。日本語では、尊敬語や謙譲語、丁寧語が存在し、動詞「見る」であればその尊敬語は「ご覧になる」のように形式が完全に異なる。例を(2)に示す。

(2) 日本語の敬語形: 動詞「食べる」:

- ・尊敬語: 召し上がる、おあがりになる、食べられる
- ・謙譲語: いただく、頂戴する
- ・丁寧語: 食べます

日本語には尊敬語(相手をたてる)、謙譲語(自身がへりくだる)、丁寧語(通常より丁寧)の大まかに3種類の敬語形が存在する(他にも形容詞や名詞に付加する敬語形があるが、本稿では触れない)。動詞「食べる」に対して、相手を尊敬する「食べられる」のラレル形や丁寧語の「食べます」のマス形のように、動詞形に文法的な敬語形を付加することで、敬意を加えている(さらなる考察は、滝浦(2005)を参照⁵⁾。

2.2. バブアニューギニアの言語

ニューギニア島及び周辺の地域は、世界で最も言語的な多様性に富んだ地域である。その地域には1,000語近くもの言語が話され、そのうち500

3) 敬語に関する統語的および形態的な研究が周辺部に位置するということであって、語用論の分野では敬語やそれに関するポライトネスの研究が世界的にも盛り上がっている中心的な研究分野である。

4) 英語には過去に“thou”という親称のために使われる人称代名詞が存在したが、現在ではほとんど使われない(Brown and Gilman 1960:252)。これは、英語話者の人間関係の考え方が、歴史的に上下関係が強い傾向から、弱くなりより平等的に移行したため、“thou”が消失し“you”に統一されたと考え

えられる。他方、ヨーロッパにおいては、ドイツ語では、学生が大学の先生に対して親称の代名詞“du”を使うことは失礼にあたり、敬称である代名詞“Sie”を使用する。ハンガリー語においても、学生にとって年齢が近い、若いざっくばらんな先生には親称“te”を使うこともあり得るが、基本的には敬称“maga, ön”を使う。他方、フィンランド語やスウェーデン語が話される北欧では、T/Vの人称代名詞の敬意の相違が存在するが、敬称を使うことは初対面ではありえても、ドイツ語やハンガリー語ほどは親称の人称代名詞は使わない傾向がある(著者による観察による)。

言語以上がニューギニア系に分類される (Foley 2000, Lynch 2018)。以下の図2にニューギニア島の言語分布の大まかな状況を示す (なお、この分布はニューギニア系以外の言語も含まれる。特に海岸部にオーストロネシア系の言語が存在する。さらに、Foley (2000) は、ニューギニア地域で話される言語分類として、Austronesian, Trans-New Guinea, West Papuan, Lakes Plain, Sko, Torricelli, Sepik, Lower Sepik-Ramu, Bougainvilleの語族を設定している)。



図2: ニューギニア島の言語分布 (引用元: WALS Language Viewerを改変: Haspelmath et al. (2005))

例えば、ニューギニア島の東半分がパプアニューギニアであるが、その中でも北部に位置するマダン州は、面積としては台湾島や日本の九州の広さに相当する。そしてそのマダン州内には270言語もの現地語が話されている (マダン州では、Austronesian, Trans-New Guineaの語族に分類される言語のみ、存在する)。

では、そのマダン州で話されるニューギニア系の4言語(アメレ語(Amele)、ワスキア語(Waskia)、

コボン語(Kobon)、ウサン語(Usan))が語彙や文法で相違しているかを簡単にまとめたのが、以下の表1である。これらの言語はお互いに隣接しているわけではないが、人称代名詞、動詞、数詞ともにほとんど形式的な類似性がないことがわかる。このようにお互いの意思疎通は完全に不可能な言語ではあるが、語順(SOV, Noun-Adj, Noun-Numerical)や複雑な動詞形態論、近い過去と遠い過去形の区別など、文法的なくぶんかの共通性がニューギニア系の言語の特徴である⁶⁾。

表1: ニューギニア言語の文法と語彙の違い:

	1,2,3人称単数形	動詞「行く」と「来る」の不定形	数詞「1、2、3」
アメレ語	ija, ina, uqa	nuga/ hoga	osol, leis, ijed
ワスキア語	ane, ni, nu	namer/ tair	itoketa, itelala, iteltoke
コボン語	yad, ne, nipe	ar/ au	nöbö, igwo, igwo aŋ nöbö
ウサン語	ye, ne, wo	isu/ di	gâri, ombur, ombur gâri

本研究では、そのようなニューギニア系の言語の中からアメレ語を選んだ。アメレ語の文法はRoberts (1987) によって記述されていることに加えて、本研究の著者が2006年以来調査している言語である。本研究では、2023年8月にアメレ語が話される村(セイン村)で呼びかけ語や敬語や命令文に関して調査した事項に基づいている。アメレ語の敬語法を調べるにあたり、目上の人に

5) ただし、日本語の正しい使用法(いわゆる規範文法)として、敬語法は、現代日本語の話し言葉では、そこまで厳密には使用されない。人によっては、目上の人であっても敬語形を使わない者もあるし、同じ地位関係(大学生の先生同士)やさらには大学生の先生が(年齢が下の)学生に話す際も、敬語形を使う者もある。また、バイト敬語(マニュアル敬語)と呼ばれる新たな敬語形が存在する(1,000円からお預かりします、よろしかったでしょうか; マイナビコメディカル「バイト敬語に注意しよう! よくある間違い例と正しい敬語を紹介」(2024年4月30日閲覧): [https://co-medical.mynavi.jp/contents/](https://co-medical.mynavi.jp/contents/therapistplus/workstyle/business_manner/1686/)

[therapistplus/workstyle/business_manner/1686/](https://co-medical.mynavi.jp/contents/therapistplus/workstyle/business_manner/1686/))

6) 著者は表1で紹介した言語のうち、アメレ語とワスキア語の話される地域に行ったことがあるが、2つの言語では語彙、文法とも全く異なっており、話者とはトクピシンで話した。当然だが、表1にも示しているように、アメレ語が通じることもない。

どう話すのか、そして知らない人、親しくない人にどう話すのかを調査した⁷⁾。

Ⅲ アメレ語のデータ

本節では、以下の三点、(1) ヨーロッパ言語に見られるT/Vの使い分けによる敬意、(2) アジア言語に見られる動詞形に付加する敬語形、(3) 命令形の丁寧形をアメレ語で調査したデータを示す。

はじめに、アメレ語にヨーロッパ言語に見られる、T/V型の人称代名詞を使い分けることによる敬意の付加について調査した。以下表2にまずアメレ語の人称代名詞を示す。アメレ語は統語論において主語となる人称代名詞は省略されることはなく、かなりの割合で義務的に出現する。

表2: アメレ語の人称代名詞: (Nose 2020)

1人称単数	Ija	1人称複数	Ege: 双数: Ale
2人称単数	Ina	2人称複数	Age
3人称単数	Uqa	3人称複数	Age/ Ege unu

表2において、3人称単数形の“uqa”は「彼・彼女」両方を指し示すが、「それ」は意味せず、人間(および比喩的に人間を表すもの、おそらくは有生の動物のオス・メスでも使用可能と思われる)にのみ使用される。1人称複数形は一般的な「我々」を示す“ege”と、「我々二人」を表す双数形の“ale”が存在する。2人称複数形と3人称複数形が同じ形式“age”で示される。ただし、3人称複数形の別の形式で“ege unu”という形式もあり、これは1人称複数形の“ege”を持つことから、「(我々を含む) 全員」という意味を表す。そして、アメレ語の人称代名詞の2人称単数“ina”と2人称複数“age”, 3人称

単数“uqa”が敬意の有無で対立するかどうかについては、そのような対立はないとのアメレ語話者の確認ができた。よって、フランス語のT/Vのような用法はアメレ語には存在しない。つまり、アメレ語には人称代名詞に敬意を表すことはない。加えて、バイリンガルであるトクピシンにおいても、2人称単数は“yu”, 2人称複数形は“yupla”であるが、“yu/yupla”に親称・敬称の区別は存在しない。

次に、動詞形に敬語形を持つかの検証である。アメレ語の動詞形態論には人称と数に屈折する以外に、時制、アスペクト、スイッチリファレンスの文法形式が組み込まれることがある (Roberts 1987)。しかし、動詞形態論の中に敬語を表す要素が組み込まれることはない。なぜなら、アメレ語には文法的に敬語形が存在しないからである。これは、次の命令形の用法において、敬語形が動詞形態論に含まれない点からも明らかである。

最後に命令形の丁寧形について観察する。まず、アメレ語の命令文の例を以下(3)に示す。

(3) アメレ語の命令形: 動詞“hoga”(来る)、“nuga”(行く)

- a. (Ina) hona! 「(2人称単数の君に向かって) 来い」
- b. (Age) hoia! 「(2人称複数の君たちに向かって) 来い」
- c. (Ina) Nuga! 「(2人称単数の君に向かって) 行け」
- d. (Age) beleige! 「(2人称複数の君たちに向かって) 行け」

7) 本調査は口頭での聞き取りインタビューで実施した。アメレ語話者(母語話者)であるNeretさんとその子供ら、およびNeretさんの奥さんであるPirominaさん(セビックの出身でアメレ語は結婚後に習得)に同席してもらい、お互いにチェックしながら慎重にデータを取った。NeretさんとPirominaさんは、年齢的には著者と同じ50歳台である。ただし、今回の調査では、ジェンダー差(男女差)については表面的な調査しか

できず、将来の課題となってしまった。加えて、宮本・安溪(2008)でも指摘されているように、敬語や呼びかけの調査は村の人間関係にも大いに影響するため、初めてセイン村を訪問した2006年から少しずつ村人の理解や人間関係の把握がある程度できた2015年以降に慎重に調査している。

アメレ語では、命令形においても、命令相手(つまり単数の人か、複数の人か)を明示し、(3a)/(3b)、(3c)/(3d)のような区別をする。その際、命令形の動詞の前に、人称代名詞を置くことができる(省略可能であるが、人称代名詞と共に使用しても良いようである)。ただし、この(3)には、日本語の「来い・来てください」のような敬意による差異はないことが判明した。また、命令形でも英語の“let's do”に相当する勧誘形の例を以下(4)に示す。アメレ語の勧誘形では、文頭に“ke”という要素を加えた上で、命令形の動詞形も異なるが、敬意の意味は付加されない。

(4) アメレ語の勧誘形:

・通常の命令:

Eeeb jaga! 「檳榔(betel nuts)⁸⁾を食べろ」

・勧誘形:

Ke eeb jeiga 「檳榔(betel nuts)を食べましょう」

最後に否定命令形(禁止形)の例(5)を見る。否定命令形では要素“ain”が英語で言うところの“don't”に相当する。禁止形でも敬意の意味が含まれない上に、否定命令では、勧誘形の標識“ke”が出現しない(Nose 2022)。

(5) アメレ語の否定命令形:

・通常の禁止:

Jaas ain jesen! 「たばこ、禁止、吸う; たばこを吸うな」

・みんなに対して禁止:

Jaas ain jowain! 「みんな、たばこを吸うな」

8) 檳榔(ピンロウ)とは、マレー半島原産と推測されている高木性のヤシであり、パプアニューギニアをはじめとするメラネシア地域、東南アジア地域および台湾などでも常用される。「使用法は未熟な果実から種子を取り出し、2~4分割してから石灰を絡めてコショウ科のキンマの葉に包んでゆっくりとガムのように噛みます。しばらくするとピンロウジと石灰、キンマの葉の成分が反応し、唾液や口の中が真っ赤に染まります。

・禁止勧誘形:

Jaas ain jobon 「たばこを吸わないようにしましょう」

その上で、どうしてもなんとか敬意を表したい場合、どのように言えるのかをアメレ語話者に尋ねた。無理矢理敬意を表す命令形の丁寧形が以下(6)である。

(6) 命令形の丁寧形:

・アメレ語: Odi ain hoga! 「来てください」

・アメレ語ではなく、トクピシンを使用する: Please kam! 「来てください」

命令形を丁寧にするには、通常の命令形に要素“odi ain”(please don't)を付加することで可能となる。ただし、(7)のような形式は、アメレ語話者は使用することはないとのことである。というわけで、アメレ語は、敬語を持たず、丁寧に話すような用法は、無理矢理言おうと言え言えなくもないが、特に丁寧に話したいのであれば、アメレ語ではなく代わりにトクピシンを使うということである。

IV | 議論

本節では、アメレ語が敬語を持たない理由に関して議論する。前節の観察から、アメレ語には、フランス語に見られるようなT/Vのような人称代名詞の使い分けによる方策も、日本語の敬語形のような用法も存在しないことが判明した。これは、ニューギニアの村社会は比較的平等な仕組みで構成(Foley 1986)されているため、わざわざ敬語

一種の精神高揚作用があるといわれ、幸福感に溢れてとても爽快な気分になるということです。しかし真っ赤に染まった唾液を道路などに吐き捨てるため、衛生的な面と景観がよくないということで問題となっているようです。」日本薬学会のサイト(2024年4月23日閲覧) <https://www.pharm.or.jp/yakusou/2023/01/post-123.html>。

を使う必要性がないという可能性がある。実際、目上の人や偉い人に敬意を込めないのかという点に関して、アメリ語話者に尋ねたところ、日本語の「社長」(manager, president)や「先生」(teacher, master)のような称号を使用することである(アメリ語の呼びかけ語の研究に関してはNose (2021) に詳しい論考がある。そして命令文における人間関係については、Aikhenvald (2010) の研究が存在する)。

社会言語学的な要因であるが、ほとんどの話者がアメリ語とトクピシンのバイリンガルである点に着目したい。例(7)でも示したように、どうしても“please”のようなお願い表現を使いたい場合、アメリ語ではなく、トクピシンにコードスイッチする。これは、アメリ語に敬語がないため、その代替として、トクピシンを使用するのである。アメリ語話者は、聞き手がアメリ語話者かどうかによって、アメリ語話者もしくはアメリ語コミュニティの内部にはアメリ語を使用し、非アメリ語話者やコミュニティの外部(もしくはさまざまな言語話者がまじわる職場や町の店)ではトクピシンを使用する(cf. Lee 2023)。つまり、知らない人や親しくない人と話すときや、公式の場などで話す場合、トクピシンで話すわけである。結果的に、話し手と聞き手の心理的距離を遠くすることで、敬意を表すことができるわけである(Zwicky 1974)。

V 結論

本研究では、パプアニューギニアで話されるアメリ語話者が敬語を使用するかどうかを調査した。調査の結果、以下のことが判明した。アメリ語話者は基本的には敬語表現(ヨーロッパ言語に

観察される、いわゆるT/V表現の使い分け、日本語やジャワ語などに観察される文法形としての敬語形)を使用しない。その代わりに、アメリ語話者は公用語のトクピシンとバイリンガルであるため、アメリ語とトクピシンの使い分け(コードスイッチ)でもって、親しみや距離を取っている。

つまり、親称として、アメリ語の“ina/age”の2人称の人称代名詞を使用し、敬称としてトクピシンの人称代名詞“yu/ yupla”を使用する。そうすることで、フランス語のT/Vの使い分けと似たような区別をすることが可能である。加えて、命令文でお願いする際は、特に敬意を付加したい場合、アメリ語ではなくトクピシンを使用する。さらに、アメリ語には、親しい友人に向かって使う呼びかけ語として“wari”(友達)があり、これは、敬意・心理的距離を取る場合、トクピシンの“frend”が使用される。つまり、呼称の使用で、アメリ語とトクピシンの使い分けがあり、これは敬語の用法と平行である(Nose 2024)。

将来の課題としては、ジェンダー間でのポライトネス表現に違いがあるかどうか、そして他のニューギニア系言語に、敬語表現が存在するかどうかを、記述文法と現地調査を並行して実施したい。

【付記】

本研究は、2024年3月に福岡女子大で開催された第48回社会言語学会にて、本論文と同じ題目で実施したポスター発表(2024年3月8日)を加筆修正したものである。発表においてコメントや質問をいただいた方々に感謝します。アメリ語のデータに関しては、Neret Tamoさんおよび彼の家族の皆さんに感謝します。本研究は、科学研究費

補助金(20K00541、代表:野瀬昌彦)の助成を受けたものである。

参考文献

- Aikhenvald, A. Y. (2010). *Imperatives and commands*. Oxford University Press.
- Brown, R., & Gilman, A. (1960). The pronouns of power and solidarity. In: T.A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, MIT Press, 253-276.
- Foley, W. A. (1986). *The Papuan languages of New Guinea*. Cambridge University Press.
- Foley, W. A. (2000). The languages of New Guinea. *Annual review of anthropology*, 357-404.
- Haspelmath, M., Dryer, M. S., Gil, D., & Comrie, B. (2005). *The world atlas of language structures*. OUP Oxford.
- Ismatul, Kh. (2011)「ジャワ語と日本語の敬語法の対照研究 絶対的敬語法と相対的敬語法」、『総合学術学会誌』10-47-54。
- Lee, C. L. (2023). Address terms by Singapore Chinese in a multilingual context. *East Asian Pragmatics*, 8, 309-332.
- Lynch, J. (2018). *Pacific languages: An introduction*. University of Hawai'i Press.
- Meyerhoff, M. (2015). *Introducing sociolinguistics*. Taylor & Francis.
- 宮本常一、案溪遊地 (2008)『調査されるという迷惑-フィールドに出る前に読んでおく本 増補版』、みずのわ出版。
- Nose, M. & N. Tamo. (2015). *Folk Tales from Around the World: Amele-Tok Pisin-English multilingual book*. Shiga University.
- Nose, M. (2020). Chapter 8: Persons and Address Terms in Melanesia: A Contrastive Study, In: T. Okamura & M. Kai, (eds.). *Indigenous Language Acquisition, Maintenance, and Loss and Current Language Policies*, Hershey, IGI Global.
- Nose, M. (2021). Vocatives in Amele, Papua New Guinea. 『彦根論叢』(滋賀大学経済学会)第429号 (2021年10月29日発行) :34-41.
- Nose, M. (2022). Negation during communication in Amele: A morphological analysis. *Journal of Asian Pacific Communication*, 32(1), 25-51.
- Nose, M. (2024). Imperatives and commands in Amele, Papua New Guinea. A paper will be presented at Sociolinguistics Symposium 25, 2024, June, Curtin University, Perth, Australia.
- Roberts, J. R. (1987). *Amele*. Croom Helm.
- 滝浦真人 (2005)『日本の敬語論-ポライトネス理論からの再検討』、大修館書店。
- Zwicky, A. (1974). "Hey, Whatsyourname". *CLS* 10: 787-801.

Do the New Guinea Language Speakers Use Honorifics?

The Case of the Amele Language, Papua New Guinea

Masahiko Nose

The island of New Guinea and its surrounding areas (Papua New Guinea, West Papua, and other Melanesia areas) are the most linguistically diverse region in the world. As many as 1,000 languages are spoken in the region, and about half (about 500) are classified as New Guinea genera (Trans-New Guinea language family).

In this study, we examined Amele, one of the New Guinea languages spoken in Papua New Guinea, to determine whether Amele has honorific forms and honorific usage. Our findings suggest that while Amele does not have a grammatical honorific system, it does show respect through lexical and other means, as well as through the use of loanwords from Tok Pisin, the official language of Papua New Guinea. In addition, sociolinguistic considerations are presented about the limited honorifics and usage of the Amele language.

Previous research on honorifics has shown that they can be classified as showing respect by using different forms of the second-person personal pronouns observed in European languages. As an illustration, the French language employs the use of “tu/vous”, whereby close acquaintances are addressed with the 2nd person singular “tu”. In contrast, superiors and first-time acquaintances are addressed with the 2nd person plural “vous”. While non-Indo-European, Uralic Finnish has a 2nd person pronoun called “sinä/te”.

The second is the grammatical form of respect, which is observed in Asian languages such as Japanese, Korean, and Thai. In Japanese, there are honorific, humble, and polite forms, and the honorific forms are quite distinct, as in the case of the verb “miru (to see),” where the honorific is “mi-rare-ru/ go-ran-ninaru.” This type of honorific form is not observed in European languages.

In this study, we conducted a field study in the Amele region of Papua New Guinea in the summer of 2023, and we would like to share the following points about the use of honorific forms in Amele.

First, the Amele 2nd person singular personal pronoun is “ina” and the 2nd person plural personal pronoun is “ege,” but it was found that there is no distinction between “ina/ege” in terms of respect, as in the French “tu/vous.”

Next, examples of imperative sentences in Amele are shown in (1) below.

(1) Amele language:

- a. Ho-ga. "Come (toward you: 2 sg)"
- b. Ho-iga. "Come (toward you: 2 pl)."

According to Amele speakers, in the imperative (1), there is a difference between ordering one person (1a) and ordering several people (1b). However, there is no deference as in the Japanese “kite (come!).”

Based on the above observations, it is clear that Amele does not have a policy of using different personal pronouns, such as “tu/vous,” as in French, nor does it have a usage similar to the honorific form in Japanese. When we asked Amele speakers whether Amele does not show respect to superiors and dignitaries, we found that they use titles such as “president” or “teacher” in Tok Pisin (or English), instead of Amele, to show respect by psychologically distancing the speaker and the listener.

Based on previous anthropological studies, the present study found that Papua New Guinean society is relatively egalitarian and thus has not developed a formal language grammar and that the inner community who are close (e.g., acquaintances, people from the same village, speakers of the same Amele language) speak Amele, in contrast, the outer community (i.e., those who are less close or speak a different language) speak Tok Pisin. They claim that they coordinate respect and familiarity by speaking Tok Pisin to the outer community (i.e., those who are not close, those who speak a different language, government officials, and foreigners).